

# 地域によって異なる北海道の獣害

明石信廣

## はじめに

北海道では、野ネズミや野ウサギ、エゾシカが造林地に獣害を発生させています。しかし、被害はいつでもどこでも同じように発生しているわけではなく、北海道内でも地域によってさまざまです。被害対策にはコストを要するため、被害の発生状況を把握し、必要となる対策を効率的に実行する必要があります。そこで、野ネズミ、野ウサギ、エゾシカによる獣害について、発生状況の地域ごとの特徴をまとめました。

## 野ネズミ被害

野ネズミ被害は北海道林業の大きな障害の一つであり、被害をもたらすエゾヤチネズミの生態や防除に関する研究が続けられてきました。1950年代以降、林業関係者によって続けられている「野ねずみ発生予察調査」のデータから、春から秋にかけてのエゾヤチネズミ捕獲数の増加のパターンや、年ごとの捕獲数の変化には、地域によって大きな違いがあることがわかっています。

ここでは、釧路東部（白糠町と釧路市音別町を除く釧路総合振興局管内）と胆振東部（自老町以東の胆振総合振興局管内）の例を示します（図-1）。年ごとの平均捕獲数は、6月にはどちらの地域でもおおむね5頭以下ですが、釧路東部では8月、10月の平均捕獲数の変動が大きく、5頭以下の年もあれば、時には20頭を超えることもあります。一方、胆振東部では、6月から8月、10月にかけての増加が少なく、8月、10月の平均捕獲数もまれに10頭を超える程度で、通常は5頭前後にとどまっています。

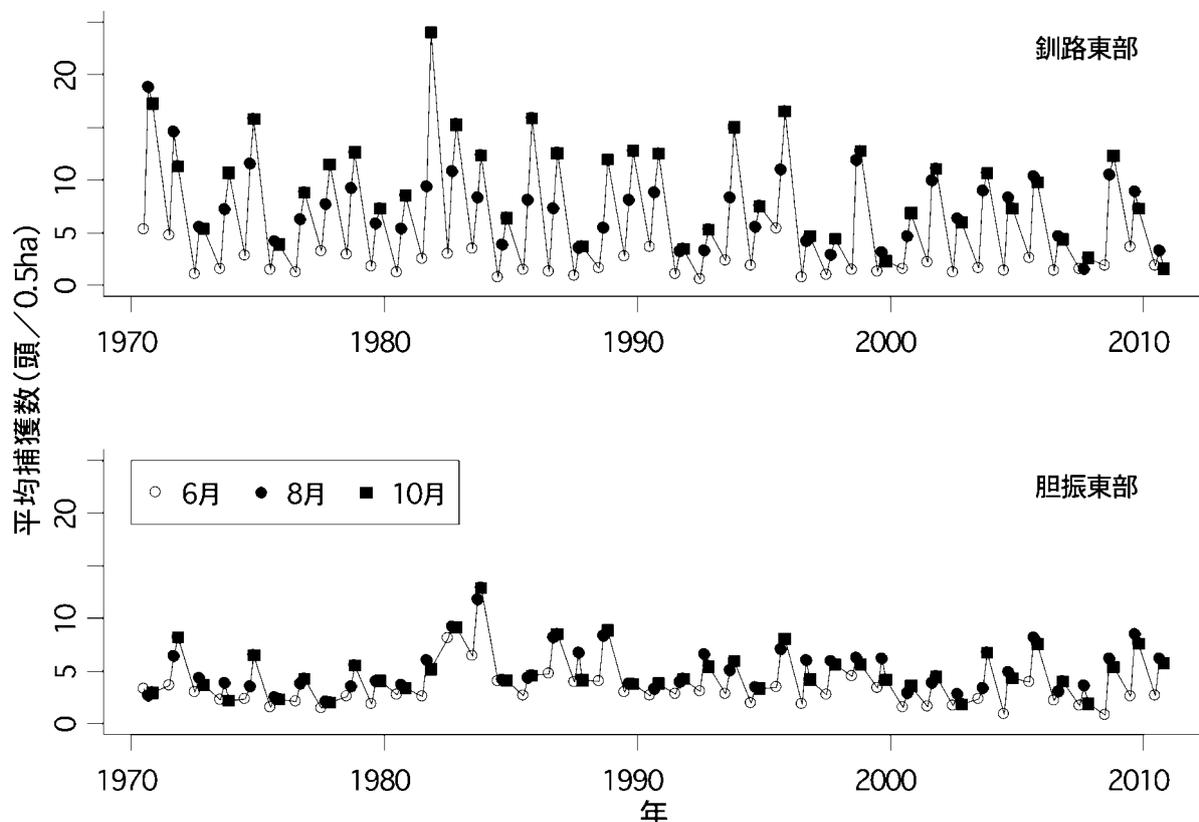


図-1 釧路東部と胆振東部における野ねずみ発生予察調査によるエゾヤチネズミ平均捕獲数の推移  
造林地及び天然林を含むすべての調査地における捕獲数の平均を示すカ

捕獲数の変化のしかたの違いとともに、被害が報告される面積にも地域ごとの違いがあります。釧路東部の一般民有林の人工林面積は約4万2千haですが、エゾヤチネズミの大発生年には被害区域面積が2,000haをこえた年もあり、数百haの被害が毎年のように報告されています。一般民有林の人工林面積が約2万9千haの胆振東部では、まれに100ha以上の被害も報告されていますが、被害のほとんど発生しない年もあります。

図-2は、北海道を13区分する森林計画区ごとに、相対的な人工林面積と野ネズミ被害区域面積の大きさを示したものです。人工林面積の円に対して、被害区域面積の円の占める割合が大きい地域では、野ネズミ被害が比較的多いことを示しています。釧路根室や網走東部のカラマツに大きな被害が発生していることがわかります。一方、胆振東部、日高、宗谷などでは、比較的被害が少なくなっています。渡島檜山では、被害報告の多くがスギとなっています。カラマツ類やスギを植栽する場合は、野ネズミ被害を受けやすい樹種として注意が必要です。

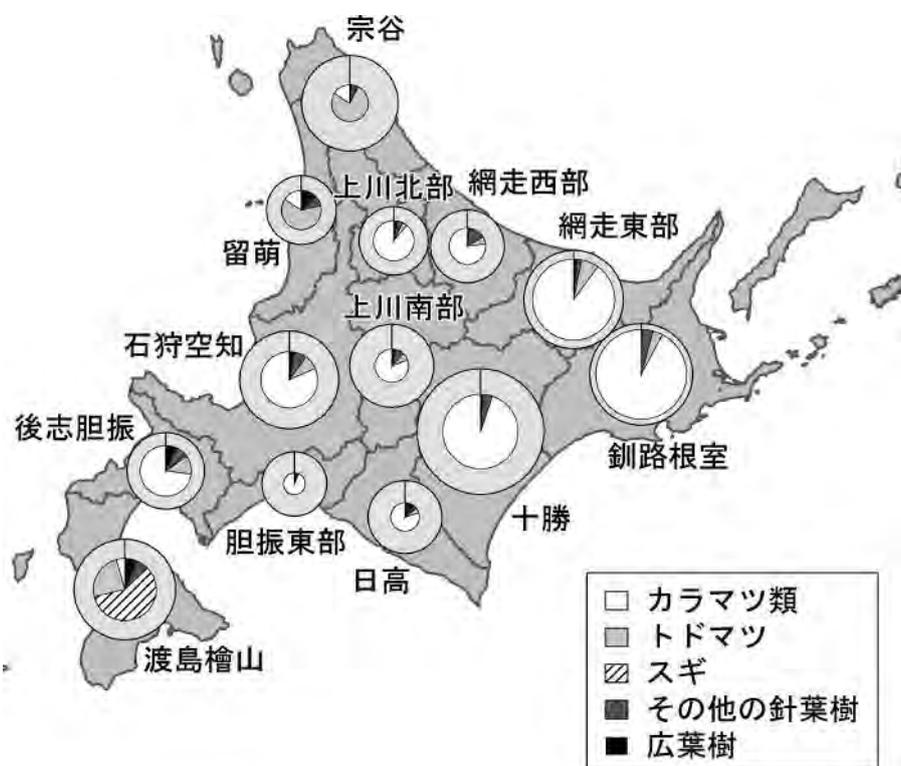


図-2 森林計画区ごとの樹種別野ネズミ被害発生状況

### エゾシカ被害

エゾシカの影響は、1990年代に道東地域を中心に問題となり、その後全道に影響が拡大しています。北海道庁では、2006年から、下刈りを行う幼齢人工林で植栽木のエゾシカ食痕の有無を毎年約3,000地点で調査してきました。図-3は、常緑針葉樹、カラマツ類、広葉樹に分けて、エゾシカの本数被害率別の調査箇所の割合を森林計画区ごとに示したものです。常緑針葉樹よりもカラマツ類、広葉樹に被害が多いこと、釧路根室、十勝、日高、胆振東部、網走東部など、比較的雪の少ない地域で被害林分が多いこと、広葉樹では全道的に被害林分が存在していることがわかります。

エゾシカ被害には、幼齢林分の食害のほかに、樹皮の食害や角こすりによる被害もあり、壮齢林、老齢林でも被害を受けることがあります。特に、常緑針葉樹の人工林はエゾシカの越冬地として利用されやすく、毎年のように角こすり被害が発生している林分が、全道的に分布しています。

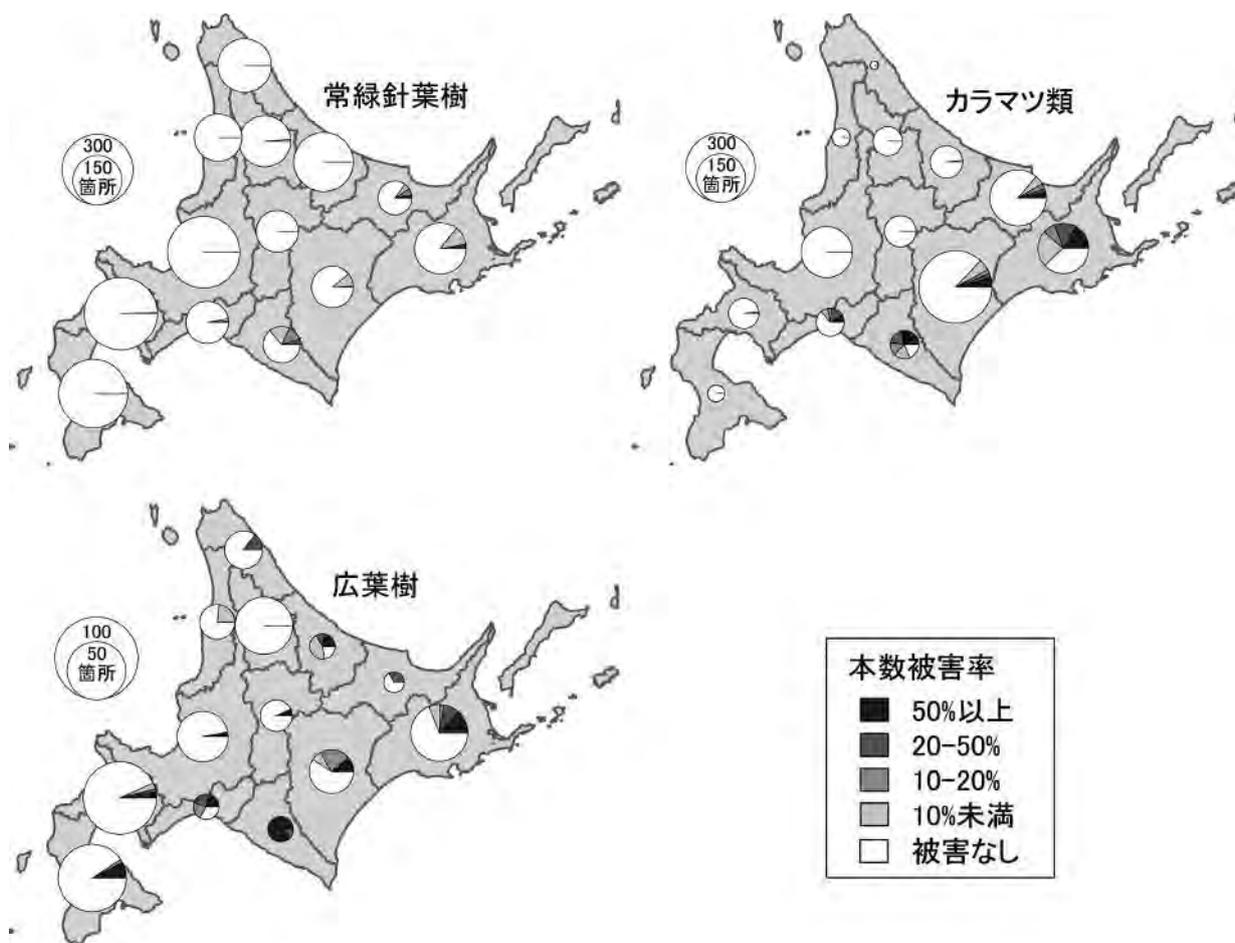


図-3 森林計画区ごとの幼齢造林地におけるエゾシカ食害の発生状況  
 北海道水産林務部「エゾシカ食害による森林への影響調査」の2009年の  
 調査結果による  
 円グラフは各森林計画区における本数被害率ごとの調査箇所の割合、円の  
 大きさは樹種ごとの相対的な調査地数を示す

### 野ウサギ被害

野ウサギ被害は主に冬季、積雪上で発生します。被害は全道的に発生していると思われませんが、広範囲にわたって枯死するような被害はまれで、被害を受けても被害木が生き残っていることが多いため、実態が十分に把握されておらず、報告されているのは被害の一部のみだと推測されます。特に、広葉樹は野ウサギ被害を受けやすく、食害を受けると枯死に至らなくても下刈り時に誤伐などの危険性が高まるため、注意が必要です。

### 地域ごとの注意すべき獣害

被害が発生してからの対策には、大きなコストがかかります。そこで、これから造林する場合には、これまでに述べたような地域ごとの獣害の発生状況を踏まえ、被害を受けにくい樹種を選択したり、被害が発生しにくいような施業を計画することが望まれます。

胆振、日高地域など、エゾシカ被害は多いが野ネズミ被害の比較的少ない地域では、主にエゾシカ対策を重視し、渡島、檜山地域や日本海側の多雪地域など、エゾシカがあまり生息していない地域では野ネズミ対策を重視した樹種選択をすることにより、その後の被害の危険度や防除コストを低下させることができます。エゾシカ被害も野ネズミ被害も多い道東地域では、あらかじめ被害防除について考慮する必要があります。



写真-1 野ネズミ (左)、野ウサギ (中)、エゾシカ (右) によるカラマツの食痕  
(野ネズミ、エゾシカの写真は南野一博撮影)

#### 効果的な被害対策のために

被害防除を適切に行うには、まず、加害動物を正確に判定する必要があります(写真-1)。野ネズミの食痕は、幅2mm以下の小さな歯の跡で、細い枝や枝と幹のすき間にもしばしば食痕が見られます。野ウサギの食痕は、幅が2.5～3.5mmで、幹や枝が切断されていたり、樹皮に彫刻刀で削ったような痕跡が残っていたりする場合があります。エゾシカは、細い枝葉を引きちぎって食べたり、樹木の樹皮を下あごの2本の前歯で食害するほか、枝の少ない幹に対して角こすり被害を発生させます。これらの被害木の周囲には、糞が残されていることが多く、加害動物を判定する重要な手がかりとなります。

エゾヤチネズミは、生息密度が年によって大きく変わります。エゾヤチネズミが生息しにくいように全刈りによる下刈りを行うのに加え、野ねずみ発生予察調査の結果をもとに、大発生年には殺そ剤を複数回使用するなど、徹底的な防除に努める一方、エゾヤチネズミの少ない年には、被害の発生しやすい沢沿いの造林地や、被害を受けやすい樹種に防除の対象を絞り込むなど、被害の危険度をきめ細かく評価することにより、防除をより効果的、効率的に実施することができます。

地域ごとの獣害の特徴についてとりまとめた「地域特性に応じた獣害対策の手引き」のPDFファイルを、林業試験場のホームページで公開していますので、ご活用下さい。

(森林資源部保護グループ)